

ブレメン経済工科大学

交換留学報告書

静岡県立大学

国際関係学部 国際関係学科 3年

私は3年次の2022年4月から2022年8月までの約5ヶ月間、ドイツのブレーメン経済工科大学での交換留学を行った。

留学が決まると、大学からブレーメンでの滞在先を探すことのできるサイトを案内された。私は他の留学生たちと生活を共にしたいと思い、5人のシェアハウスを選択した。ルームメイトはブラジル人が二人とスペイン人とフランス人が一人ずつおり、共通語は英語であった。全員がブレーメン経済工科大学への留学生であり、すぐに仲良くなることができた。彼らとは旅行に行ったり、料理を一緒に作ったり、部屋を暗くしてホラー映画を見漁ったりなどして、とても楽しい時間を過ごすことができた。

次にブレーメンでの生活について述べたいと思う。ゼメスターチケットがあればトラムとバスを無料で利用でき、ほとんどの場所を移動することができたのは非常に便利であった。しかし、ドイツの公共交通機関は日本の公共交通機関とは事情が異なり、遅延、キャンセルが日常茶飯事であったことも併せて伝えておきたいと思う。トラムが機能停止し、市街から家まで歩いて帰ることはよくあることであった。ストライキなどの理由でトラムが機能停止することもあったが、サッカーの試合がブレーメンで行われたときには必ず公共交通機関は混乱

していた。試合がある日には街中が緑の Werder Bremen のチームのユニフォームで溢れかえっていた。ブレーメンは決して大都会ではないが、その分サッカーの試合がある日は地元の人々のブレーメン愛や情熱を肌で感じる事ができた。私は静岡出身であるが、一つのことでもここまで街全体が一つになる空気感は静岡では感じたことがないものであった。それには少し戸惑いつつも、とても羨ましくも思った。

次にブレーメンでの大学生活について報告する。私は履修登録で上限分の講義を登録し、自分の興味に合わせて講義を絞っていった。最終的には 15 単位分の講義を履修し取得した。講義を減らした理由は、自分の語学力向上のために時間を注ごうと思ったこと、週末を使って国内旅行をたくさんしようと思っていたことの 2 つである。講義を少なくした分、気合を入れて机に向き合うことができたし、たくさんの場所に足を運ぶことができたと思う。

ドイツの講義では日本のものより、発言を求められることが多かった。世界各国から来た留学生と同じ教室で学ぶため、授業内容に関する各国の具体的事例を講師が尋ね、軽い議論を行うような日も少なくなかった。講師、学生の両方から、日本のことを詳しく聞かれることが多く、日本が世界第三位の経済大国であ

ることを強く実感した。留学前は日本経済のニュースや記事をあまりフォローしてこなかったし、それを英語でアウトプットする経験をしてこなかったのも、うまく伝えることができなかった。講義も半分にさしかかったあたりから、相手の質問を理解し、答えることができる知識と表現力が身につけてきたことを体感でき、少し自信がついてきたことを覚えている。語学面でかなりの不安があった留学であったが、なんとかやり切ることができた。そこで学んだのは、誤魔化さず、相手の目を見て話すことの大切さだ。そうすることで、相手も真剣に話を聞いてくれ、そしてそれが良いコミュニケーション、ひいては良い人間関係につながるということ学んだ。

たくさんの友人を作ることができたことは留学で得た一番の財産であると思う。ブレーメン経済工科大学には日本語学科があり、彼らとは月に何度もヴェーザー川で飲み会を行った。彼らからはドイツでの生活についてやドイツの文化を教えてもらったし、逆に私は日本のことを彼らにたくさん話した。飲み会の席ではあったが、「自分は国際人だ」と話してくれた根っからのドイツ人との会話は特に印象的だった。将来は、日本はもちろん多くの国で生活をしたい、自分はドイツに縛られていないと言っていた。国際人を語る彼以外にも、外国で仕事をしたいという日本語学科の学生は非常に多かった。

ドイツは非常に豊かな国で、外国に行かねば高給な仕事が無いという国ではない。それにもかかわらず、日本などの外国に目を向けている学生が多くいることは新鮮であった。そんな彼らとの交流で私自身も変わることができた。将来のことで、より多くの選択肢を頭に浮かべることができるようになった。

日本語学科の学生のおかげで、私はとても刺激的な交換留学をすることができた。そんな彼らの多くは今、静岡県立大を含む日本全国の大学に交換留学をしている。彼らと日本でまた会うことができるのはとても嬉しい。彼らがしてくれたように、私もまた彼らの留学の助けをし、より深い友達になりたいと思う。

【ドイツ】
HSB・ブレメン経済工科大学



国際関係学部
国際言語文化学科
年



1.はじめに

私は2022年4月～2023年3月の約11ヶ月間、ドイツ北部にあるブレーメンに留学した。ブレーメンは都会すぎず、田舎すぎず、生活するのにちょうどいい大きさの街でブレーメンの音楽隊が有名だ。もしかしたら聞いたことがある人もいるかもしれない。Covid19の世界的流行やウクライナの戦争など、世界中が混乱している中で始まった私の留學生活について振り返っていきたい。

2.学生生活

静岡県立大学はブレーメン経済工科大学(Hochschule Bremen)と派遣協定があり、私はそこで2セメスターの間、留学生として勉強していた。International Businessという学部にも所属しており、フランス、スペイン、イタリアなどヨーロッパを中心に世界各国から集まった留学生とともに学んだ。所属は経済学系の学部だが、実は県大では文化人類学系の勉強をしていて経済学について詳しくなかったため夏学期はAcademic writingやCultureについての授業を中心に受講していた。学生生活やドイツでの生活に慣れてきた冬学期は経済系の授業と心理学を専攻した。レクチャーというより、ゼミナール型の授業を履修していたので授業中は頻りに教授から質問されたり、チームや個人で意見を述べたりする機会が多かった。1コマ2時間、長い時は連続で4時間の授業だったが常に集中して気が抜けない時間だった。また、授業中に日本について質問された時に自分の住んでいた国にも関わらず知らないことが多いことに気づき、時間があるときは日本の経済や政治について情報をインプットしようと心掛けた。毎回、ドキドキして授業に参加していたが確実に世界に目を向け、広くいろんなことに興味を持つようになったと思う。



そして、学校生活でもう一つ絶対に触れたいことがある。HSBには日本語学科があり、日本語を学んでいるドイツ人学生が多くいる。私は日本語学科の授業に参加して作文を添削したり、漢字テストや単語テストの採点をしたりと授業以外の多くの時間を彼らと共に過ごした。授業以外にもカフェでタンデム(お互いが勉強している言語を教えあうこと)をしたり、一緒にビールを飲んだり食事をしたりもした。時には困っていることを相談したり、生活に必要な手続きを手伝ってもらったりとドイツ生活でたくさん助けてもらった。留学が終わってからもよく連絡をとっており、大好きな人たちだ。



3.多国籍シェアハウス

ドイツでは学生はシェアハウスに住むのが一般的で、私も例にもれず最大7人で共同生活を送っていた。今まで一緒に暮らしたフラットメイトの国籍は、ドイツ(大家さん)、フランス、メキシコ、ブラ

ジル、トルコ、イタリア、パキスタン、コロンビア、デンマークと多様だ。大体が留学生だったり、近所にある語学学校の生徒だったりなので2週間から半年くらいで入れ替わることが多い。キッチン、シャワー、トイレは共同で使った。基本的に英語で会話する。夜はよくキッチンに集まって一緒に食事したり、パーティーやバーに出かけたりもした。フランス人のフラットメイトはよくみんなにクレープを作ってくれて、トルコ人は美味しいDöner(ケバブのようなもの)のお店を教えてくれ、メキシコ人はとにかくフレンドリーでよくパーティーに誘ってくれた。大家さんは83歳のドイツ人女性だが、とても優しく一緒にロンドンまで旅行した仲である。フラットメイトたちとはお互いの国に旅



行する約束をし、帰国した。そんな大好きな家だが、ブレーメンでの家探しは争奪戦でなかなか大変だった。私は実際、出国する1週間前まで家が契約できていなかった。今後ブレーメン留学を考えている方は、大学が物件サイトを公開したらすぐにでも何件かに申し込みをすることをおすすめする。

4.ブレーメン留学を考えている方へ

もし時間が許すなら半年と言わず1年、ドイツに住むことをおすすめする。日本のように治安がよくて食べ物が美味しくて、清潔で居心地の良い国ではないけれど、とっても素敵な国だ。四季があって、たくさんのイベントがあって、様々な国の友達ができるはず。ときどき、ドイツ語で何を言っているのかわからない時もあるし、行政手続きにはとても時間がかかるし、トラムはキャンセルされるし、ストライキは起きるけど大抵のことはなんとかなるし、なんとかできる。それも後から振り返れば、印象に残るイベントだと思えるはず。きっと日本人に囲まれて日本語を話して生活する環境では経験できないことがたくさんあると思う。ぜひ、一度挑戦してみてください。



Ich hoffe, Sie werden eine schöne Zeit in Deutschland verbringen :)

Viel Glück!

ブレーメン経済工科大学
交換留学報告書

静岡県立大学

国際関係学部国際言語文化学科 3年

私は、2019年9月から、2020年3月までの約7ヶ月間、ブレーメン経済工科大学（Hochschule Bremen）での交換留学を行った。本来、一年間の留学期間を計画していたため、コロナウィルスの流行に伴う非常措置としての、強制帰国という形で留学期間が短くなってしまったことは不本意ではあったが、この7ヶ月は間違いなく私にとって、自分の価値観に大きな影響を及ぼした、とても忘れがたい経験となった。

まず、私は、日常生活で英語に触れている時間を増やしたいと思い、シェアハウスに住むことを決め、スペイン、ポルトガル、メキシコからの留学生、そしてもう一人の日本人、5人での生活をした。そこでは、言語の壁以上に、文化の違いから生じる生活習慣の違いに苦しんだ。フラットメイト達は、多くのイベントやパーティーに私を誘ってくれた。こちらで友達の輪を広げたい私にとって、それはとてもありがたい。最初のうちは喜んで参加していた。しかし、毎週末、時には平日にも開かれるパーティーに参加することがつらくなってしまった。それから、毎日のように、家に誰かが連れてきた知らない人がいることや、家での誕生日パーティーなどにそれぞれが全く知らない友達を連れてくることにも、もともと初対面の相手と話をするのが得意ではない私は、ストレスを感じていた。だがある日友達に、「誘われても、素直に No といえば良いし、無理に全員と仲良くなる必要はない。」というシンプルなアドバイスをもらい、確かにその通りだと納得した。それから、誘いを断っていやな顔をされる

こともなかったし、面識のない人とでも、その場を楽しむための会話だと思えばラフに話すことができ、様々な人と接することで、視野が広がるような話をたくさん聞けたと思う。それは、今まで人との関わり方の正解を勝手に作り上げていた私の固定概念が崩れた瞬間であった。思い返せばフラットメイト達との生活の中で私は、幾度となく固定概念が覆され、その代わりに新しい価値観を教えてもらった。そしてみんなで、街を散策したり、移動遊園地に遊びに行ったり、旅行をしたり、ご飯を食べたりしたこともかけがえのない思い出である。

次に、大学生活について触れたいと思う。私は、3年後期からの留学だったこともあり、留学決定直後はもともと、半年間留学するつもりでいた。しかし、半年間ドイツ語の基礎を固めた上で、もう半年間は現地の大学生が受けている授業を同じように受講したいと考え、1年間に延長した。そのため、前期に私が受けた授業は、German as a Foreign Language という授業の A2.1 と A2.2 の二つのみである。A2.1 のクラスは、文法事項を先生が英語で解説していくという形で進められた。県大のドイツ語の授業で、文法事項については一通り学び終えていたため、この授業は正直、英語のリスニング練習という感覚であった。一方もう一つ A2.2 のクラスは、学生の発話メインで進められた。日本で会話練習をほとんどしていなかった私は、先生の質問を聞き取ることすらままならず、授業が始まって最初の頃は、質問が自分に飛んでくるのが怖くて仕方なかった。そんな中で、自分のドイツ語力向上の助けになったのが、タンデ

ムである。タンデムとは、自分の母語を学びたい相手と、相手の母語を学びたい自分が、互いに母語を教え合うもので、ドイツなどでは一般的なシステムである。私の通っていた大学には日本語学科があり、そこで日本語を教えている先生が、私たち日本人留学生と、日本語を学ぶ学生とのタンデム関係を斡旋してくれたのである。私は、授業数が少ないため空き時間も多く、ドイツ語に大きな不安を感じていたため、10人ほどの学生とタンデムを組んでもらい、毎日2、3人とタンデムをした。タンデムを毎日することで、ドイツ語に触れる時間も増え、タンデムを通して仲良くなったドイツ人と、もっとドイツ語で会話できるようになりたい、相手の日本語の上達を実感し、負けていけないという感情が、ドイツ語学習のモチベーションにもなった。最初は、英語をベースにして会話を進めていたが、徐々にドイツ語と日本語が増えた。学校終わりにご飯を食べに行ったり、休日にスポーツをしに行ったりしたときも、ドイツ語で話しかけることを心がけるようになっていた。そうして、質問におびえていた授業の中でも、先生の質問を理解し、答える、さらには先生と会話のやりとりもできるようになった。最初は何も理解できなかった言葉を、理解できるようになってくると実感できることが楽しかったし、単語はもちろん、文法構造も日本語とは全く異なるドイツ語という言語そのもの、そして、言語から垣間見えるものの考え方の違いの面白さに気づくことができたように思う。

また、私は、留学前からヨーロッパの社会システムに興味があったのだが、半年

間、ドイツの社会システムの中で生活し、日本との違いを、身をもって感じた。まず、道行く人々にお金を乞うホームレスの人々の多さ、彼らにお金や食べ物を渡すことが習慣化していること。それから、瓶やペットボトルを専用の機械に返すとデポジットが帰って来るという制度や、環境に配慮した BIO 商品の需要の多さ。また、銀行に手続きをしに行きたいと思っても、13時には閉まってしまうため、学校帰りには間に合わない。日曜日にはスーパーを含めほとんどの店が閉まるので、とても不便である。私は、日本での便利な生活に慣れてしまっていたため、ドイツでは不便に感じるが多々あったが、毎日家族全員で夕飯を食べることが当たり前であるドイツの家庭を想像すると、日本の便利さの裏にあるものを考えてしまうなと思った。また、私が特に興味深く思ったのは、アビトゥーアという制度である。私はこの制度について、合格すれば大学に入学する権利を得られる無期限の資格である。というほどに考えていた。実際大学には、本当に様々なバックグラウンドを持つドイツ人学生が集まっていることに驚いた。私は、日本語を学ぶ学生と関わるが多かったのだが、年齢も、経歴も、出身地も全く異なる学生達が、日本語を学ぶために集まっているのである。途中で進路を変えることも可能だから、そこには、本当に日本語と経済学を学ぶ意思のある学生だけがいて、意識と意欲の高さに感心したし、感銘を受けた。

もともと私は、英語、ドイツ語の語学力向上と、興味のあるドイツ文化の中で生活してみたいという理由から、今回の交換留学を決めた。しかし、ドイツは移民も多

く、多国籍の人々が暮らし、留学生も多いため、外国語を使った生活、多様な文化を経験できたことはもちろんだが、それ以外にもこの留学で得たものは、想像以上にある。留学中、私は、ふと考えたことがあった。「ペットボトルをポイ捨てすることは良くないことだが、道ばたで生活する人々の明日は、誰かが捨てたそのボトルで作られるのかもしれない。それなら、そのボトルのデポジットとして返ってきたお金を直接渡せば良いのではないか。でも、ボトルを拾って、それをデポジットに換えることで、環境保護に貢献した報酬としての50セントと、現金として直接渡された50セントはきっと同じではないだろう。」そのとき、今まで以上に、ホームレスの問題も、環境問題も、とても身近に感じている自分がいた。それから、コロナウィルスの流行により、なるべく早く帰国しなければならないという状況になったとき、一緒に帰国した他の日本人はもちろん、急な帰国決定での慌ただしい手続きを手伝ってくれ、また会おうと送り出してくれたドイツ人の友達や、自分達も大変な中、心配してくれた他国からの留学生に本当に助けられた。私はその中で、予定期間滞在できなかった無念さと、徐々に帰路が経たれていく不安の中で、世界共通の人の温かさを感じた。多くのことを学び、気づけた、このような貴重な経験をさせてもらえたことに感謝し、今後に生かしていきたいと思う。

Hochschule Bremen

交換留学報告書

国際関係学部 国際言語文化学科 3年

ブレーメンで過ごした1年間は、今まで生きてきた中で一番印象的な時間だった。街、人々、生活様式、考え方、様々なことが日本と違った。

「これが普通」「これはおかしい」…日本の「普通」は理解されず、それをうまく伝えることも難しかった。その一方で、日本とは全く違う国の文化を知り、理解することは非常に面白かった。本レポートでは、このような私の異文化体験について報告する。

私が通っていた Hochschule Bremen には、日本語学科がある。その日本語学科のドイツ人学生とは、すぐに仲良くなることができた。

前学期は残念ながら希望していた授業を履修できなかったため、授業数が極端に少なくなってしまったのだが、日本語学科のドイツ人学生数人とタンデムの約束をし、授業が無い時間帯はタンデムをした。質問が無くても、他愛のない会話を楽しんだ。昔から人見知りだった私にとって、外国人と気兼ねなく会話できるようになったことは目覚ましい成長だといえる。

後期も、新たにタンデムパートナーを見つけドイツ語学習を継続した。秋は新入生が入ってくる。日本語学科へ入ってきたものの、今まで日本人と話したことのない学生も多く、彼らは緊張していた。私がドイツに来たばかりの時にそうされたように、私は緊張していたある学生に自分が使える全てのドイツ語で話しかけた。そうすると、最初はうつむきがちで言葉も発さなかった彼が、だんだん自ら話をしてくれるようになった。私が帰国する直前には、彼の家で大勢で餃子パーティーをするほどになったのだ。ドイツ語で一生懸命話しかけた結果、かけがえのない友人ができた。こんなに喜ばしいことがあるだろうか。

後期は、前期よりも多くの授業を履修することができた。

特にドイツ語 (B2) の授業では、頻繁に意見を求められた。その授業のテーマについて自分の意見を即興で述べるのは難しかったが、繰り返すうちにだんだん慣れていった。期末のプレゼンテーションでは、日本について紹介した。日本でもまともにプレゼンをしたことがなかった私にとってこのプレゼンはとても不安だったが、練習を重ねたおかげで落ち着いて話すことができ、プレゼン中に先生から投げかけられる質問にも、焦らず答えることができた。ドイツに来たばかりの頃は、予想外の事態や質問に臨機応変に対応できず焦ることが多かったが、この授業で様々な質問に焦らず答えられる力がついたように思う。ちなみにこの授業では、一番良い評価 (1.0) を受けることができた。

3ヶ月ほど続く夏休みには、Volkshochschule の語学講座に通った。

Hochschule で勉強している留学生とは違い、ほとんどがドイツで働くためにドイツ語を勉強している人々であるため、私のドイツ語学習に対する意識も上がった。

また、学生たちの国籍が様々で、バックグラウンドも様々であるため、Hochschule とはまた一味違う異文化交流ができた。特に、学生の中には英語が話せない人も多く、「自分だけ英語が話せない」という劣等感を抱くことなく常にドイツ語で会話できたことが非常に良い経験だったと感じる。

週末や長期休暇は、基本的にドイツ人学生と過ごしていた。私たち学生はゼメスターチケットという定期券のようなものを持っていたので、ブレーメンのあるニーダーザクセン州の中ならどこへでも電車で行けた。例えば、私はフォルクスワーゲンの本社がある Wolfsburg にゼメスターチケットで行った。本来ならどこへ行くにも交通費がかかるが、ニーダーザクセン州という広範囲を自由に行き来できるのは学生の特権であり、私も実際様々な場所に足を運ぶことができた。これは非常に良い体験だった。

日常生活では、日本との違いを様々な点で見つけることができた。特に印象的だったのは、スーパーやドラッグストアの店員である。日本では、レジでは立ったまま接客をするし、身だしなみや言葉遣いも細かく規定されている。だが、ドイツではそうではない。店員は座って時々水を飲みながらレジで接客をする。男女ともに、髪の毛、アクセサリなども人それぞれだ。しかし、私はドイツのレジの接客で嫌な思いをしたことがない。むしろ、笑顔で挨拶してくれる店員も多く、日本よりも気持ちの良い接客だった。ドイツのレジでの対応を体験してから、日本の働き方、職場の規定、また過度なおもてなし精神に疑問を持つようになった。

ドイツで1年間過ごしたことで、日本にいたら絶対に気づけなかったようなことを身をもって実感した。また、日本を客観的に見つめ直すことができた。今回の留学を実現してくださった大学、先生、また両親に感謝し、ドイツでの経験を無駄にせず今後の人生に大いに役立てていきたい。



ブレーメン経済工科大学 交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部 国際言語文化学科 4年

去る2月に無事帰国をし、約1年間の交換留学を終えたわけだが、私は帰国する1週間程前から、自分はどのように成長できたか、実りある留学生活にできたかどうか自分自身に問いかけていた。そこで、1つの結果報告としてだけでなく、自分の備忘録としてこのレポートをまとめ上げる。形式的なレポートは諸先輩方、あるいは他大学の学生が既に出しているはずであるため、ありきたりな表現ではあるが、「長いようで短かった」1年間の交換留学で感じた異文化について、経験したこと、得たことをより具体性をもって、2つのパートに分けて触れていこうと思う。

1. 学業について

私は今回、大学の交換プログラムとして、ブレーメン経済工科大学国際経営学部へ留学し、学びを得た。実は大学入学前からこのプログラムの存在は知っており、むしろこの制度があるからゆえに県大への入学を決めたとも言える。だからこそ、交換留学生に正式決定した時には、喜びもひとしおであった。話が逸れてしまったが、現地の大学で私が履修した講義の中から特に印象強いものについて紹介する。

私が最も力を入れた講義が、主専攻が経営ではない留学生（ブレーメン経済工科大学には世界各国から留学生が集まっている）のための経営学だ。講義は英語で進められ、テキストに沿って行われる形式だった。テキストをなぞるといふ進行の仕方は日本のものとあまり変わらない印象を受けたが、流れとしては、先生と生徒が対等で、まるでみんなで机を囲んで会話をしているようだった。生徒は日本、韓国、中国、フランス、ルーマニア、エストニア、メキシコなど様々な国籍が入り混じり、20人程度の規模であったが、特にヨーロッパ圏とメキシコの学生が常に発言していて、250人以上の規模の講義でも静けさが保たれている日本では見られない光景だった。ここで学んだことは、紛れもなく「自主性」である。発言せずただ座っているだけかもしれないと思えばできるが、それをするなら学んでいないことと同義になる。自分の意見を発することで、ようやく授業に参加できると言っても過言ではない。

1つ頭に焼き付いている場面がある。就職面接のシュミレーションをするとなった時のことである。いつものようにヨーロッパ圏とメキシコの学生が手を挙げた。10分程度の打ち合わせの後に彼女たちが演じ始め、残りの私たちはそれを評価するという役割についた。私は、国によって面接のタイプは違うのだから難しいのではないかと予想していた。しかしいざシュミレーションが始まると、形式はさほど変わらないことに気づいた。そして何より、面接官役、受験者役がともに1度もつかえることもなく、テンポよく会話を進めていたことに、彼女たちのポテンシャルの高さに驚愕した。志望動機も自己PRも長所や短所も、今の自分が同じ立場に立ったとしても、彼女たちには及ばないだろう。なぜ彼女たちがそれを易々とできるのかを考えたとき、普段の授業態度がそれを可能にしているのだと気が付いた。彼女たちは普段から、パブリックな場所で自分の意見を人に伝えることをしているから、あのような場面でも、自分の言葉で企業への自己アピールができるのだと悟った。私はそれから、羞恥心を捨て、自分への訓練としてできるだけ発言を増やすことを目標とした。ここでの経験から、自主性を養うことができた。

2. 食文化について

次に食文化についての印象が非常に強かったため、ここに記す。これを読んでいる皆さんは、ドイツの食（飲み物）と言ったら何を思い浮かべるだろうか。ドイツに留学する前の自分を回顧すると、過去の私はおそらく「ソーセージ！じゃがいも！ビール！」と答えるであろう。ドイツ人自身も自覚があるように、これは間違いではない。しかし、それ以上に豊富な食の資源が多くある。ドイツの食に関する事で一番驚いたのが、野菜、果物の安さである。じゃがいもや人参、玉ねぎなど毎日食べる野菜・果物の殆どがkg単位で売られており、しかも1kg 1ユーロ（=現在の為替で125円ほど）という驚愕の安さである。常に自炊で生活すれば、1か月1万円以内の食費に抑えるのも難くないだろう。さらには肉、乳製品、お酒の豊富さも日本とは桁違いな上に、もちろん破格の値段段である。英語の語学授業で、みんなで材料を持ち寄ってランチを食べることがあり、その時に



現地人おすすめの肉とその食べ方について教わった。それは、「Hackepeter」というものである。見ての通り、基本は半分に切ったパンの上に生の豚挽き肉とみじん切りの玉ねぎをのせて食べる。生の挽肉を食べるなんてどうかしてる——と今では日本人として正常な判断ができるが、その時の私は全くそんなことなど考えもせず、美味しく完食した。その後日本の友達と電話でそのことを話すと、ひどく驚かれたため、これはドイツと日本の食文化のギャップだと気づくことができた。調べてみると、ドイツでの肉の管理基準は日本よりもハードルが高く、厳しい審査を通り抜けた肉だからこそ、生肉が可能なようである。肉食の歴史が深い分、安全性への取り決めも厳密に決められているのだそうだ。

このように、ドイツの食の資材は豊富で安くおいしいものばかりであるが、現地の彼らはそれを（日本的な感覚からすると）無駄にする食べ方もしばしば編み出している。有名なもので言うと、Milchreis（直訳：牛乳ご飯）だ。私たち日本人の共通認識として、「ご飯は甘く食べるものではない」があると思う。しかし、ドイツで広く知られている Milchreis は、デザートとしてその名を馳せている。私も怖いもの見たさで試食してみたことはあるが、ご飯は食事として食べるべきという思いが一層強くなっただけであった。それゆえ、タンデムパートナーが Kakaomilchreis を目の前で食べ始めたときは、ついに



ページ 2

写真を撮ってしまうほどだった。彼女はもちろん、これを美味しいと言って食べていたため、国によつての食育の違いに対しても、改めて考えさせられた。

ドイツ以外のヨーロッパ全体にも言えることだが、ドイツでもベジタリアン、ヴィーガンの波は大きい。出かけた際に色々なカフェやレストランで食事をしたが、ほとどの店でもヴィーガンやベジタリアン用の料理、ドリンクがメニューにあった。私のタンデムパートナーの1人もヴィーガン寄りのベジタリアンで、肉や魚は食わず、卵や牛乳とも距離を置いていた。ドイツに留学して乳製品の多さにショックを受け、手あたり次第美味しそうな乳製品を食していた私にとってはもったいないことのように思われたが、話を聞いてみると、命を奪われる生物たちを思う彼女の考え方も理解できた。頭ごなしに否定するのではなく、その行動の理由を聞くと、案外奥深いものが多いことを学んだ。

こうして現地で多くの人と交流し、意見交換することで、自主性や多角的なものの見方を身につけることができた。自分は日本の小さな田舎出身で、周りの大人は皆その地域で生まれ育ち老いていく人生を歩む人がほとんどだった。そんな中で、もっと視野を広げたい、周りを見た上で自分で判断したいと主張した私を応援してくれた家族には感謝しかない。そして、心配しながらもドイツへ送り出してくれたファイファー先生や学生室の先生方にも、この場を借りて感謝申し上げたい。

冒頭でこの留学での成果を不安視していたがことを述べたが、国際言語文化学科に在籍する1学生として、ただ2つの分野の1部分だけでもこれだけの文化比較、異文化理解ができたのは、大きな成果であると思う。今後は、留学で培った自主性と広い視野を生かせるような仕事で活躍したい。そして後輩に伝えたいことは、とにかく柔軟な考えをもつべきということだ。なぜなら、素直であることが成長の鍵だと思うからである。自分が今少しでもそこに引け目を感じるのであれば、ぜひその解決策に、ドイツ留学を選択肢として考えてみてほしいと思う。

ブレーメン経済工科大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部

国際言語文化学科 4年 ヨーロッパコース



ドイツ留学を決めたのは、3年生になる前の春休み中でした。それまでは、留学に際して生じる、サークル活動やゼミ、就活時期への影響を懸念し、なかなか決心を付けられずにいました。しかし、留学するとしたら今しかない、異国の地に行って視野を広げたいという思いが最後まで残ったため、留学に行くことを決心しました。

今回のドイツ留学について、以下の4つに分けてお話ししたいと思います。始めに、ドイツで生活するにあたって必要な手続きについて。次にブレーメンでの生活、そして学校生活について。最後に、私の経験や感想を述べたいと思います。

① 必要な手続きについて

出発前にしたことと現地到着後にしたことに分けてお話しします。前者について、留学が近づくとブレーメン経済工科大学の **International Office** から手続きに関するメールが送られて来ます。そのメールに指示が書かれていたので、それに従って行動しました。中でも大事なことは、部屋探しと前期の学費（ゼメスターチケット代）の支払いを早めに済ますことです。部屋探しは、部屋がなかなか見つからないこともあるので、気になる家があればすぐに大家さんにメールを書いた方がいいです。また、現地で行う手続きの際に必要な書類

(パスポートの写真や残高証明書など) を、日本にいるうちに揃えておく必要があります。たびレジへの登録や日本の保険への加入も忘れずに行う必要があります。

現地では、保険加入、住民登録、口座開設(普通口座)、ビザ申請の順に手続きをしに行きます。保険加入の手続きは、オリエンテーションの時期に学校で行うことができます。住民登録は、街中にある **Bürger Service Center** という役所に行きます。予約は必要ありませんが、手続きできる時間が限られているのと、同じように手続きをしたい人がたくさん来るので、朝7時頃には並んでいるようにしました。銀行は、一番店舗数が多く、いつでもお金を引き出しやすい **Sparkasse** が良いと勧められました。Am Brill にある店舗が大きく、多くの留学生はそこで口座を開設しています。契約した保険会社には、口座開設後に口座番号を伝える必要があります(今後、保険料を支払うため)。ビザ申請に必要な全ての書類がそろったら、それを持って **BSU (Bremen Service Universität)** へ申請しに行きます。実際にビザが降りるまでに、そこからまた約一か月かかるので、早め早めの行動が大事になります。

② ブレーメンでの生活について

ブレーメンは他の大都市に比べると田舎です。しかし、街の中心にショッピ

ングストリートがあり、スーパーやカフェをはじめ、H&M や ZARA といった洋服店、雑貨屋やドラッグストアなどが立ち並んでいるのと、街から少し離れた場所にも2つのショッピングモールがあるので、日常生活に必要なものはそういうところで大体揃えられると思います。また、買い物が好きな友達はよくハンブルクにも行っていました。ハンブルクはベルリンに次ぐドイツ第2の都市ですが、ブレーメンからは電車（1時間半くらい）で無料で行くことができます。近代的な部分とは反対に、ブレーメンには聖堂や教会、昔ながらの雰囲気が残る地域や建物もあります。また、天気の良い日に川沿いを散歩したり公園でのんびりしたりできるので、都会とはまた違って落ち着いた印象を受けました。ブレーメンの気候は穏やかなので過ごしやすいです。私はサッカースタジアムの近くに住んでいました。サッカーの試合がある日以外は、ゆったりとしている場所だったので勉強するにしてもとても環境が良かったです。ブンデスリーガが行われる日は、スタジアム周辺にユニフォームを着たサポーターが集結し、ビール瓶を片手に盛り上がっていました。街中のカフェやバーでも試合が放送され、夢中になっているお客さんをよく見かけました。家から一番近いスーパーは、トラム（路面電車）で5分くらいのところにありました。街にもトラム1本で10分程で行けたのでとても便利でした。たくさんのお店や観光地がギュッと凝縮されていて、ブレーメンは生活するのにとても便利な街で

す。治安は、駅周辺、Gröpelingen という地域、郊外を除いては比較的良い方だと思います。しかし、スリなどの軽犯罪は多いので人が集まる場所では常に注意しなければなりません。

③ 学校生活について

私たち県立大学からの留学生は皆、International Business という学部に所属します。受講できる授業の種類としては、英語で開講される一般の授業、ドイツの学生に交じってドイツ語で受講する授業、そして語学の授業（ドイツ語か英語）です。日本人留学生は、通常一クラス 160 ユーロかかる語学のコースを 2 つまで無料で受けられます。そのため、私は 1 年間で違うレベルのドイツ語の授業を 4 つ履修することができました。（「ドイツ語 A2.2」「ドイツ語 B1.1」「ドイツ語 B1.2」「経済ドイツ語 B2.2」）レベル B1 の先生は、生徒にたくさん話を振って、自分の言葉で話させる方でした。レベルにあったドイツ語の表現やより良い自然な言い方をたくさん教えて頂き、効率よくドイツ語を学ぶことができました。なにより、間違いを恐れずとにかく話そうという雰囲気の中で言語を学べたことは、ドイツ語を話す時の自信にも繋がったと思います。しかし、語学の授業はいつも 18 : 00 か 19 : 45 の開始だったので、夕飯の時間と重なっていたのが少し大変でした。

ブレーメン経済工科大学には、日本語と日本語の経済が学べる専攻があるため、日本に興味を持っている学生とたくさん出会うことが出来ます。ドイツにはタンデムといって、日本語を学んでいるドイツの学生とペアを作って、お互いの言語や文化を教え合うシステムがあります。授業の無い日や空き時間にも、タンデムを有効活用してドイツ語を勉強することができます。私は、タンデムパートナーの子と旅行をしたり、何度か家に招いてもらってみんなでお食事をしたりすることもありました。互いの語学を勉強しているので、分からないことがあれば気軽に質問できる点がとても良かったです。スケジュールが合えば、何人ともペアを組むことができます。

④ まとめ

留学前は、準備に追われ、手続きや異国の地での生活のことを考えると不安でたまりませんでした。しかし、いざ行ってみると意外とどうにかなるもので、慣れてくればそれが普通になりました。また、学校が始まれば、友達もできてだんだんコミュニティーが広がっていきます。そうになると、もう怖いものなしです。例えば、保険の契約で問題があっても、保険会社に一緒に来てくれたり、電話をかけてくれる誰かが必ずいます。私も困ったことがある時は、すぐにドイツ人の学生や日本語を教えている日本人の先生に相談していました。

みんなが助けてくれます。

私にとってドイツに行くことは長年の夢でした。ああドイツではこうなのか、と初めの頃は毎日新しいことを経験するのが楽しくて全てが新鮮に思えました。もちろん、違う言語が話される国にいて、相手の言ってることが理解できなかったり、言いたいことが上手く言えずにもどかしく感じることは日常茶飯事でしたが、それにショックを受けたり、誰かと話すのが怖いと思うようなことは一度もありませんでした。というのは、はじめから大家さんが親切にしてくださったり、学校には困った時にいつでも助けてくれる人たちがたくさんいたり、一緒の家に暮らしていた韓国人の女の子とその友達と気軽に色々な話ができる環境にいたことがとても大きかったと思います。本当に周りの人たちに支えられました。

私の中で一番濃い留学の思い出は、とても仲良くなったドイツ人の子とその家族と一緒に過ごした休日です。ブレーメンでは大家さんと一緒に建物に住んでいましたが、住む階が違ってあまり交流が無かったのを顧慮してくれたのか、家にお邪魔させてもらった際に、その子とその子の両親が「学期休み中やクリスマス、イースター休暇中もこっちに居ていいよ。そしたらドイツ語の勉強のためにも良いと思うし、それにドイツの文化も見せてあげたい。」と言ってくれました。それを聞いてとても嬉しかったのですが、今までそんなオープンな

ことを言われたことが無かったので、初めは少し戸惑いました。しかし、「是非！」というように言ってくれたので好意に甘えてお家に居させてもらうことにしました。ドイツの文化をたくさん教えてくれただけでなく、ブレーメンに帰る時に料理やケーキをタッパーに入れて持たせてくれたり、おばあちゃんがケーキやクッキーの作り方を教えてくれたり、みんなが私に対して家族の一員のように接してくれて、本当にありがたいと思っています。毎回会うたびに多くのことを教わり、ドイツ語もそうですが、自分の中身も成長することができました。留學生活が終わった今でも、ビデオ電話をしたりして繋がりを持っているのは嬉しいです、この出会いは一生ものになりました。

留學が全く想像していなかったものになりましたが、ただ今思うことは、留學に行って、行くことができ本当に良かったということです。今まで生きてきた環境とは全く異なる環境で一年間過ごしたことで、いろいろな気づきがあり、考えることも多々ありました。ドイツで経験したことや感じたことを大切に、今後に繋げていきます。

ブレーメン経済工科大学

交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部

国際言語文化学科 4年 ヨーロッパコース

本学の提携校ブレーメン経済工科大学（以後 HSB）に約 1 年間籍を置き、慣れない異国の地で送った生活を振り返ると、何もかもが刺激に満ちており、常に新鮮さを感じていられる、おそらく人生においても唯一無二のものとなったと言えるだろう。移民・難民が多く暮らす多民族国家とも呼べる場所に、観光客としてではなく文字通り一市民となって初めて見える景色というものは、以前の私には想像も及ばないものであった。光と闇、その国の両方の面を知るのに 1 年という期間は決して十分ではなかったが、それでも知れることは多くあった。文化、人間性、思想全てにおいて異なる国において生活することは、その人が勤勉であれ怠惰であれ確実に有意義なものになる、ということだけは断言できる。

例えば私のように、机に向かって勉強することがあまり得意でなく、つい友

人らと外出することを優先してしまう人間でも、その遊びから得られる言語における経験はかなり大きなものであったと、結果論ながらも思う。文法の正確さや文章の読み書き能力の向上には机と向かい合うことは避けられないが、語彙の補強や経験、度胸は座学では決して得られないものである。またそういった座学により得られるものは、一人の時や、言ってしまうえば日本においても同様に得ることはできる。ただし話すことの経験や度胸や慣れ、といったものは社交的な場面でこそ得られるものである。私は実際、2学期目において講義は他の学生よりも少なかったが、その代わりとしてタンデムを数多く行うことでドイツ語のみを話す機会を増やした。

正直なところ、夏休みまでの数ヶ月間は、ドイツ語の知識があまりに不足していたことや、それを恥ずかしいと考えてしまう姿勢もあり、ほとんど英語のみで過ごしてしまった。英語の経験を積むことも結局は重要なことではあるし、決して悪いことではないと思うが、せつかくドイツという、英語圏ではない国に過ごしている以上、その国の言葉を話せるようにならない、というのは非常にもったいないことであるとも思う。ただ、夏休みの半ばから住まいをホームステイから、9人が住むWGに移したことはかなり大きな功を奏したと

言える。その頃から実感を伴う程に言語における上達が見られた。ドイツ人やオーストリア人、ドイツで働くイタリア人やブラジル人、ドイツ語を何不自由なく使いこなす人々と生活を共にすることは、言い換えれば朝起きてから寝るまでその言語に身を浸すことと同義であるのだと身をもって体感した。帰国する頃には、決して満足はできないものの、友人と歓談するにも、保険会社や銀行と契約の話をするにも問題なくことを成せた、というのは成果としては十分なものと言えるだろう。反省点としてあげられるのは、2学期目は頑なにドイツ語のみを使うことにこだわりすぎていたために英語の上達があまりみられなかったことである。

留学生活の間に受けた大きな影響として挙げられるのは、考え方におけるものも多くある。

まずは日本という国家における当たり前なものには、他国においては決してお目にかかれぬものもあるということ。時刻表に忠実な公共交通機関や、公共の場の清潔さは、この国においては欠けば批判されうるものである。しかしそれは決して存在して当然のものなどではなく、小さな島国ながらも大きな存在

感を誇る極東の誇るべき文化とも言える代物なのだ。

また全く別の例として、外国人排斥などのレイシズム的な思想は大いに弾劾されてしかるべきものではあるが、嫌悪する側にも時には経験から来る、否定することが憚られる理由があることを知った。以前の私は、差別はその対象に対する無理解と不寛容の産物であると考えていた。しかし、差別は豊富な経験や対象への理解からも十分に生まれうるものであると、今では考えるようになった。現在も民族差別は根絶されることが望ましいものである、という考えは持っているが、ある人物が、自らの経験によって生まれた差別を掲げていた場合、その経験を持っていない我々には彼、もしくは彼女を批判する権利はないし、決して消されて良いものではないとも考えるようになった。

このように、この1年を通して得たものは数多くあり、少なくともそれらは今後の人生においても大きな意味を持つものになるだろう。良くも悪くも楽天的な性格のため、一般の留学生が感じる言葉の壁や困難、というものはあまり感じないまま留学生活を終えてしまったことは気がかりであるが、総じて楽しく充実して過ごせたと言える。

ブレーメン経済工科大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部

国際言語文化学科 3年 ヨーロッパ文化コース

私は、約1年間ドイツのブレーメン経済工科大学に留学させていただきました。ドイツでの留学の目的は主に二つありました。一つは、一年生の時から履修していたドイツ語の上達、もう一つは、ヨーロッパの文化や歴史、政治などに、大学入学当初から興味があったため、大学で今まで学んだ知識を基に自分の考えをより深めることでした。これらの目的を踏まえて、私がこの留学で経験してきたことを報告します。

まず、学校生活について授業と課外活動の二つの面から述べたいと思います。授業は、週二回ドイツ語のコースがあり、その他にはEUとドイツの歴史、多文化コミュニケーションやジェンダーなどの授業を受講しました。また、日本では学んだことがなかったマーケティングにも挑戦しました。ドイツ語のコースは、初めは日本で身につけた自分のドイツ語のレベルが低く、ギャップを感じ苦労しましたが、努力すればするほど、次第に授業の理解度が上がっていくのを感じられました。ドイツ語のコース以外の授業はすべて英語で行われましたが、様々な国から来た留学生たちとのディスカッションを通して、自分の視野を広げることができました。特に面白かったのはEUとドイツの歴史についての授業です。静岡県立大学でも1・2年生の間でこのテーマについて多くの知識を身につけましたが、ヨーロッパの学生達が、自分たちが持つ歴史としてどのようにEUを認識しているのか、様々な意見を聞くことができた

ので興味深かったです。

授業の合間の長い休み時間や放課後には、タンデムを行いました。タンデムとは言語交換のことで、日本語を勉強しているドイツ人の学生と会話をしたり、お互いが学んでいる言語の分からないところを教え合ったりします。わたしは5人タンデムパートナーがいたので、ほぼ毎日タンデムを行っていました。冬にゲーティンスティチュートのドイツ語検定試験を受験したのですが、タンデムパートナーが親身に手伝ってくれたおかげで合格することができました。ドイツ語の上達だけでなく、日常生活でも困ったことがあれば相談して助けてもらえたので、とても心強かったです。今年の秋にはドイツの学生が日本に留学に来るので、わたしも彼らにとって頼りがいのある存在になれるといいです。

次に、長期休暇など学校のない日の過ごし方について述べたいと思います。夏休みと冬休み合わせて4か月ほどの長期休暇は、授業の予習・復習やドイツ語の自習などをして過ごしました。ドイツに住んでいるとはいえ、夏休みは3か月間ドイツ語の授業もタンデムもなかったもので、半年間かけて身につけたドイツ語を衰えさせないために、自習を意識的にやることを目標にしていました。自分が決めた計画通りに過ごせた一日もあれば、怠けて過ごしてしまった一日もありました。自由に使える時間があればあるほど、その時間を使っ

た結果や達成感には、自分自身に責任があるのだということを感じました。また、大みそかにはタンデムパートナーの実家に招待してもらいました。ドイツの年越しをドイツ人の家族とともに過ごすことができ、なかなか体験できない貴重な年越しを過ごすことができました。

長期休み中に行ったことがもう一つあります。それは旅行です。ドイツはヨーロッパの中で経済面でも政治面でも重要な役割を果たしている国ですが、地理的にもヨーロッパの中心に位置しています。そのため、ヨーロッパの他の国々への旅行がしやすいです。私は、全部で10ヶ国以上を訪れました。限られた時間と資金の中で、できる限り充実した旅行にするために入念に計画を立てるなど、楽しいだけでなく、自分自身を成長させることができた旅行でした。各国でたくさんの美術館や博物館を訪れましたが、いままで高校・大学で学んできた歴史的な美術や遺産の数々に触れることができ、非常に感銘を受けました。特に鮮明に印象に残っているのは、ポーランドのアウシュビッツ絶滅収容所を訪れたことです。ドイツの歴史を勉強する上で欠かせないナチス政権下の悲しい記憶を、実際にその場に行って感じることができました。展示を見るたび、当時の悲惨さに胸が痛みましたが、それと同時に、昨今右傾化してきている国際社会に対して、もっと考えを巡らせなければならないと感じました。

ブレーメンは小さな都市ですが、私にとって魅力的な都市でした。戦前から残る市庁舎など、伝統が色濃く残っている面もあれば、難民の積極的な受け入れなど、現代世界が抱える問題にしっかり向き合っている面もあり、歴史の流れを感じられる場所でした。また、ブレーメン経済工科大学で出会った学生達は勉強に対する意識がとても高く、様々な問題に対して自分自身の考えをしっかりと持っていました。さらに、私の留学中にちょうどドイツで総選挙が行われたため、学生達や先生たちとドイツの政治について頻繁にディスカッションをしました。そんな恵まれた環境で一年間勉強できたことを嬉しく思うと同時に、支えてくださった方々に感謝したいです。今まで述べたように、一年間のブレーメン経済工科大学での留学を通して、留学前に掲げていた目標の達成のみならず、それ以上の経験を得ることができました。この一年間で身につけた語学力や知識をさらに磨き、それを活かして社会に少しでも貢献できるよう、これからも努力したいです。

ブレーメン経済工科大学 交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部

国際言語文化学科 4年ヨーロッパコース

以前にも海外旅行で何度か外国を訪ねたことはあったが、ヨーロッパ圏を訪れたことは無かったので、今回の留学中に触れ合うことができた人々や言語、街並み、食事など、すべてが非常に新鮮なものに感じられた。約5か月間に及ぶ留學生活では、旅行などの滞在ではなく、短期間ながらも海外で生活したからこそ経験できたことが多くあるように思う。

まずドイツに着いて驚いたことは、様々な人種や国籍を持つ人たちが集まっていることである。私は毎日 ترامに乗って大学に通っていたが、車内ではドイツ語以外の言語が飛び交う場面に頻繁に出会った。また、大学でできた友達も「ドイツ人とトルコ人のハーフ」という人や「ドイツに住んでいるけどポーランド人」「両親がイギリス人とオーストラリア人」という人など本当に様々な背景を持つ人たちだった。そのような背景があるからか、ドイツにおいて、意見は「言葉にして伝えるべきもの」であると感じた。特に、そのことを痛感したのが授業中である。先生は単純な質問から、深い質問まであらゆる問いかけを私たちに投げかけた。その問いについて自分の考えを英語でまとめて分かりやすく述べるということに関して私はとても苦労したが、そのような意見をしばしば交換し合う根底には「自分と他人の意見が異なるのは当たり前」という意識が見え隠れするように感じた。また、私は英語が得意ではないため、ドイツに来た当初は大家さんとの会話は必要最低限になってしまっていた。そんなある日、大家さんから「あなたの考えていることが分からない。伝える努力をしてほしい。」と言われて、私は自分の怠慢な態度に気づかされた。それ以降、私は生活していくうえでの問題から、その日あった些細な出来事まで様々なことを話すよう努力するようになったのだが、この一件もまた、言葉によるコミュニケーションが重視されているために生じたものだと感じている。

このように、困難な場面に直面することも少なくなかったが、いつも周囲の人たち

が私を助けてくれた。特に、ブレーメン経済工科大学で日本語を学んでいる同世代の学生たちの存在はとても大きかった。彼らは、在学中に留学とインターンシップのために日本に滞在しなければいけないため、かなり本格的に日本語を勉強している。私は彼らの中の数人とタンデム(互いの言語を教え合うシステム)を組んだ。タンデムでは、授業で習ったドイツ語を実践できるだけでなく、文法や単語の使い方を気軽に質問できたり、教科書には載っていないような若者言葉を教えてもらったりできる貴重な機会であった。おかげで私は、約5か月間という短い滞在期間にもかかわらず効率よくドイツ語を身につけることができたように思う。一方で、彼らの日本語についての質問に答えようとするとき、私は日本語教師養成課程の授業で習ったことを活かすことができたし、日本語を客観的な視点から見つめるという経験ができた。また、タンデムパートナーとは一緒にショッピングやバーベキュー、テレビゲームをしたり、彼らの実家に招待してもらったり、お互いの誕生日を祝ったりなど、タンデムの時間以外にも非常に濃密な時間を過ごすことができ、私の大切な思い出となっている。本当に親切な人たちに恵まれたことで、私は初めてのヨーロッパ圏での滞在、また初めての留学だったにもかかわらず、ホームシックにもならず何不自由なく留學生活を送ることができた。私の留學生活を支えてくださったすべての方に感謝したい。

ドイツでこのような経験をしてきて帰国した今、交換留學制度を通してブレーメン経済工科大学に留學できて本当に良かったと感じている。約5か月間という短い時間ではあるが、実際にドイツという国の中で生活することで、ドイツで暮らす人々の生活を垣間見ることができたし、同世代の学生がどのような目標を持っているのか、何を勉強しているのか、何に関心を持っているのかなどを、彼らとの交流の中で直接知ることが出来た。また、そのようなことを知れば知るほど、自分が生まれ育った日本という国を客観的に見る事が出来たように思う。

今はまだ、自分の留学経験がどのように今後生きて来るのかははっきりとしたことは何とも言えないが、自分が直に触れてきたあらゆることが自分の糧になってくれているような気がする。例えば、これまでも授業などでドイツの移民問題については学んできたが、私にとってはどこか抽象的でぼんやりとしたものだった。しかし、実際にドイツで生活する様々人々を実際にこの目で見たことで、より具体的で現実的な問題として捉えることができるようになった。留学中に見聞きしたこと、それを通して感じたことは決して忘れずにいたいし、ドイツでできた友達との縁をこれからも大切にしていきたいと思う。また留学を通して痛感した自分の弱点である「語学」に力を入れて、さらに世界を広げていくのが今の目標である。

ブレーメン経済工科大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部
国際言語文化学科 4年 ヨーロッパ文化コース

約4ヶ月半のブレーメンでの生活は、日本とドイツでの生活環境の違い、多様な人種の中で生活すること、言語教育の難しさなど多くのことを学ぶ貴重な経験となった。その中でもまずは交換留学先であるブレーメン経済工科大学での学校生活について報告させていただく。

この大学で私はツーリズムを主として学ぶ学部にも所属した。私が受けていた講義は主にツーリズムを他国との比較、または環境面から考える講義とドイツ語を学ぶ語学コースである。ツーリズムの講義ではドイツ人の余暇の過ごし方、ツーリズム産業の経済効果、観光客数増加によって問題視される環境問題とその対策、現地の住民への社会的影響などをドイツ人学生と共に英語で講義を受けた。特に印象的であったのは、ツーリズム産業と環境問題の関連性である。山などの自然な場所が観光地としてあげられることの多い日本でもドイツ同様に観光客によって元からあった自然が破壊されたという事例も耳にしたことがある。都会や田舎に限らず観光客誘致を促進する場合、まずはその際の観光地となりうる土地への環境的リスクが必ず伴うことを考えたうえでツーリズム産業を盛り上げていくことが大事であるということを知った。語学コースは各クラス平均10人～15人の少人数制であり、国籍もバラバラな学生がレベルに沿って集まって受講する。基本的に毎回の授業でひとつの文法テーマがあげられ、それに関する練習問題、ペアワーク、短い会話文の練習などを行っていた。さらに、ドイツ語を勉強するうえで欠かせないのがタンデムパートナーである。タンデムパートナーとは外国語を勉強する者同士がペアになってお互いの言語を教え合う制度である。私はだいたい週に3日タンデムをし、授業でわからなかったことを聞いたり、日常生活でのドイツ語の疑問を尋ねたり、ドイツ語と日本語を交えて趣味の話をしたりしていた。さらには、若い世代がよく使う言葉や方言、丁寧な言葉表現と友達同士における言葉表現のちがいはタンデムのおかげで学ぶことができた。タンデムは義務的にペアが振り分けられるわけではなく、気軽にどちらか一方が「タンデムをやりようよ」と声を掛けて始まることが多いので友人を増やすきっかけにもなりやすい。また、タンデムをやることで私が感じたのは言語教育の難しさである。お互いの言語では十分に補うことができない言語表現があったり、ドイツ語独特又日本語独特の文法があったり、当たり前のように話している母国語を文法的に説明することの難しさと全くジャンルが違う言語を学ぶことの難しさを知った。

次に私の研究テーマに則した報告をさせていただく。私のゼミでの研究テーマは「移民に対する言語教育において効果的な政策とはなんであるのか」である。以前の調査において移民対象のドイツ語受講講座が政策の一環としてあるにも関わらず、彼らの言語能力が劣っているため限られた職に就くことしかできない、移民の子供たちが幼い頃から他の生徒に比べてドイツ語を学ぶ機会が少ないために言語能力が劣っているという結果が出ていた。後者の移民の子供たちの言語能力に関して今回は述べる。わたしが通っていたブレーメン経済工科大学で出会ったドイツ人学生の多くも両親が移民であるという人が多くいた。両親がパキスタン人、ロシア人、タイ人、ベトナム人、コソボ人など国も地域もバラバラ

である。彼らつまりは移民の子たちであるが、大学で学ぶ学生であるので母国語となるドイツ語は勿論、英語を話し、現在は日本語を学んでいるという学生たちである。よって言語能力において劣っている部分は彼らからはみてとることはできない。しかしその他にも街中の飲食店ではトルコ人をはじめとする移民を多く見かけたが、彼らの多くもドイツ語を流暢に話し、たまに英語も話していたという印象である。ドイツといっても育ってきた地域や環境によって差は生じると思うが、移民の子の言語獲得問題は減少しているのではないかと考える。

最後にわたしがドイツ人学生との会話の際に最も印象的であった出来事に関して述べる。その学生は以前日本に1年間留学していた学生であり、日本語も非常に上手であったので一度私は日本で働きたいのかと尋ねたことがあった。しかし彼は「日本は好きだけど働きたくはない。だって日本ではいつまでたっても外国人だから」と答えたのである。自分がどれだけ日本語を話すことが出来ても、見た目が西洋人であるのでお店に行けば英語で話しかけられるのだそうだ。ドイツは移民が多いからこそ見た目への偏見が少なく、見た目がアジア人であろうと肌の色が違おうとドイツ人なのである。日本は移民も少なく島国であるがために外国人の流入が元々激しかったわけではないので、仕方がないことなのかもしれない。けれども実際私も日本で欧米人をみかけると、英語で話しかけなければいけないと無意識に思っていたということに気づいた。彼のように日本が好きであるという学生にそう思われるのは非常に悲しいことである。彼と話して自分が無意識に持っていた偏見にも気づかされ、外国人との接し方やコミュニケーションについて考えさせられる良い機会になったと思う。

そして約4ヶ月半のドイツでの留学生活で、日本語と日本文化を学ぶドイツ人学生たちと関わるのが一番多かった。だからこそ日本文化を、日本の歴史を、見つめ直すことができた。自分が知らない日本の良さをドイツ人に教えてもらうのは非常に楽しかった。日本について、ドイツについて、自らの考え方について、考えさせられることの多かった留学生活であった。この経験をこれからの自らのステップアップにつなげていきたい。以上で報告をおわらせていただく。

ブレメン経済工科大学 交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部
国際言語文化学科 三年 ヨーロッパ文化コース

私は今回の交換留学を通じて、ドイツ現地の人たちの人柄、生活様式、文化など様々なことを自分の身をもって感じる事ができた。

私が感じた彼らの人柄は、誰かが助けを求めていたら問題が解決するまで全力で手助けをすること。偶然スーパーで出会った見ず知らずの人であっても、困っていたら笑顔で手を差し伸べる。日本人は見知らぬ人に話しかけようとしませんが、彼らにとっては初対面など何の問題もないように感じた。私がドイツ人の友達と会うとき、その友達の友達も一緒に参加して食事を共にするという場面も多々あった。少し人見知りする癖がある私はドイツに来たばかりのころは戸惑ったが、自分が今まで知らなかった人と会話することの面白さを見出すことが出来るようになった。ドイツで外国人という立場で暮らしていた私は、当然のことながらどうしたらよいかわからないことに直面することが多く、自分で他人に助けを求め問題を解決しなければならなかった。このサイクルを繰り返していくうちに、私もドイツの人たちのように他人に対する抵抗感が薄れ、さらに積極的に行動できるようになった。

ドイツの人たちは休日をととても重視している。休日は一日中家の中でテレビを見てごろごろするという人は少ないように思える。彼らにとって休日は家族や友達と一緒にゆったり過ごす日であり、カフェでおしゃべりをしたり公園に行って散歩などをして楽しんでいる。またドイツの気候は常にいい気候であるとは決して言えない。言ってしまうと大半は曇りの日が多く、晴れていても突然雨に見舞われることもしょっちゅうである。なので天気の良い日は大勢の人が外に出て散歩をしたり日光浴をして楽しんでいる。そして彼らは健康にも重視している。ジョギングをしている人や通勤通学の移動手段として自転車を使っている人も多い。自然保護の面を考慮して自転車を好んで移動している人も多い。ドイツといえば肉中心の食事を想像するが、彼らが毎日そのような食事をしているわけではなく、むしろ野菜や果物が安値で手に入ることもあり健康的な食事を取り入れている。ドイツにはベジタリアンや乳製品も摂取しないベーガンが多いこともあり、彼ら向けの肉や魚を含まない食事も普及している。また EU 有機農業規則で厳しく定められ認証されるオーガニックブランドのビオ食品が存在する。ほかの商品と比べると値段は上がるが、食品への安全性を求めビオ食品を購入する人は少なくない。

ドイツのイベントごとは家族と一緒に祝られることが多い。最も大切なイベントの一つであるクリスマスは家族と一緒に食事をし、お互いにプレゼントを贈りあう。自分の家族だけでなく、恋人の家族のクリスマスパーティーにも参加し親睦を深めるのだ。そんな家族にとって最大のイベントであるクリスマスを私はホストファミリーと共に過ごした。本物のドイツ家庭のように食事を共にし、プレゼントを交換し、実の家族の一員のようにクリスマスを祝った。またドイツではイベントの有無に関わらず家族とともに過ごす時間を大切にす。週末を使って家族に会うために何時間もかけて実家に帰ることはしょっちゅうである。

約一年私はドイツで生活して様々なことを経験し、得た知識を吸収した。最も強いドイツ

のイメージは、人が温かいということ。親切で、自然を大切に、家族や友人を思いやる心を持っている人がたくさんいる。私がこの交換留学を通してドイツで暮らすことがなかったら、このドイツの人たちの素敵な人柄に気づくことは出来なかつたろう。彼らと現地で触れ合うことによって、ドイツのことをたくさん知れただけではなく、自分の内面的な部分でも成長できたことがたくさんある。日本に帰国して思うことは、思い切ってドイツに留学してよかったということ。今回ドイツで交換留学生として勉学に励む機会を与えてもらったことに、改めて心から感謝したい。